
責務に勤しめ委員長！

幻霧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

責務に勤しめ委員長！

【Nコード】

N9493F

【作者名】

幻霧月

【あらすじ】

此処は魔法が存在する一つの世界。人がいて、天使がいて、悪魔がいる。そんな世界の一片、『光ヶ丘』に主人公、『冬真』はいた。ある日冬真は友人の魔法実験に付き合った際に起きた不祥事により、一人の少女と出会う事になる。その時から彼の人生は大きく変わってしまったのだ。

プロローグ（前書き）

こんにちは（＊＜∩＞）ノ
下手くそですが頑張りたいです。

あと、この小説は一応魔法学園物ですが学校はあまり出てこないかもです。

軽い戦争物です。

アドバイス貰えたら嬉しいっす。

プロローグ

美しく咲き乱れていた桜の花も、風に舞い散り色を消し、代わって青々とした若葉が街の景色を飾る、暖かな皐月の中旬。

此処、光ヶ丘市にも例外無く暖かな日光が降り注ぎ、民家が立ち並ぶ住宅街を明るく照らしていた。

道の両側に続く灰色の塀で、道路と民家との空間は隔てられているが、塀に妨げられても等しく、等間隔に並ぶ家々は見てとれる。

形、屋根の色、駐車場や庭の有無、同じ民家でもいろいろと違うものはあるものだ。

その中でも、一際目立つ建物があった。

白く塗られた外壁が、日光を受けて一層明るく輝いていて、異様に清潔感を見せ付け、均等に横一列に並ぶ扉には淡い青色を被せてある。

そんな屋上付きで三階建てのこの建て物こそ、駅から徒歩10分の

集合住宅、もといアパートである。

鋼色に光る鉄製の突堤には、まだ錆が付いてない事から、まだ出来て間もない事が見受けられる。

事実、このアパート、まだ住民が一桁しかない。

家賃も比較的安く、駅にもまあまあ近いので結構いい場所なのだが……。

まあ、実際入居希望者がいないのだから仕方ない。

さて、ここらでそんなアパートの内側、一階にある一室を覗いてみるでしょう。

アパートの一階にある、白い壁紙に囲まれた、結構広い3LDKの整った部屋に彼はいた。

薄く茶色み掛かった黒髪のショートヘア、アイロンをかけられ皺のないポロシャツを身に纏い、黒いスポンを履き、視力補助のための眼鏡をかけている中肉中背の少年。

やや切れ長の眼と黒い瞳の持ち主で、眼鏡があつての事かも知れないが、知的な印象を持たせる顔立ちをしている。

彼の名は『神崎 冬真』（カンザキ トウマ）。

歳は15で、光ヶ丘市にある魔法学校『光ヶ丘高等学校』に今年の4月入学したばかりの一年生だ。

そして、このアパートの大家でもある。

学生である彼が大家をやっているのはある理由があつた。

時は遡ること約三ヶ月前。高校受験に合格した際、両親に一人暮らしがしたいと申し出た冬真。

口実として、『これから社会進出していくための知識や経験を育みたい』と適当な言葉を並べておいた。本当の理由は違ったが、本心を語っても両親は許可してくれない事を予測していたので嘘をついた。

何も言わずに勝手に家を出てくよりは、嘘をついてでも安心させてから家をでるのが、今まで育ててくれた親への礼。
人としての仁義というものだろう。

……それでも、いつか本当の理由を話す時は親だったが、冬真が『

どうしても』と頼み込み、一週間くらい粘ってやっと折れてくれた。

その時両親は、一人暮らしの許可と共にいくつかの条件をつけてきた。

一つ目は、毎日とは言わないが、定期的に顔を見せにくること。

二つ目は、事故などの不祥事が起きた際には必ず報告すること。

三つ目は、父親が友人に頼み込んで借りたアパートに住む事。その時はまだ、アパートは完成していなかったが、4月前には完成するという話だった。しかし……せっかく建てたアパートを貸すなんて、その友人さんも、相当のお人よしだ。

些か過保護だと思いつつも、冬真はその条件を飲み、晴れて一人暮らしを始められたという訳だ。

と言っても、借りたアパートから両親が住む実家までの距離はそれほど遠くないので、結局両親の管理下に入った形だけの一人暮らしだ。

それでも冬真は一人暮らし出来る事に胸を踊らせていたのだった。

そして、入学してすぐにアパートへ引越し、大家として生活し始め

て、早くも一ヶ月が経ち今に至るという訳だ。

一ヶ月経てば環境にもなれてくるものだ。

初めは新鮮に感じたアパート暮らしも、今は当たり前の事になりつつある。

平日は学校に通い、自クラス担任の給料目当てで行う授業を受け、学友と他愛もない雑談をし、帰りにファーストフードを腹に放り込み、疲れたら家に帰ってベットで寝る。

こんな刺激のない生活が、最近マンネリ化してきたような気がする。

だが、今日は土曜日なので高校は休みだ。

「……暇だな」

冬真はリビングに設置してあるソファーに腰掛けながら、沈んだ声で呟いた。

大半の学生にとって、ゆとり教育はありがたいものかもしれないが、客観的な意見をいうと、過度な休暇は人間を堕落させる原因になるので、あまり好ましくない。

その分、夏休みや冬休みなどの長期休暇を削る学校もあるが、バイトに勤しむ学生にとっては、それもかなり迷惑である。

冬真の結論は、『夏休み等はバイトとかがあるからいいとして、土曜日休みは子供にとって、あまりいいものではないだろう。』というもの。

えらく現実的な少年である。

「……土曜日なんて消えちまえばいいのに」

天井を仰ぎながら、無理な事をいいはじめた。

長々と哲学的なものを展開していたが、つまるところ冬真は暇だった。

余りの暇さに表情がげんなりしていて、死んだ魚のような虚ろな瞳で天井を見上げている。

冬真は土曜日が嫌いだった。

いろいろ理由はあるが、今1番の理由は暇だから。

帰宅部なので部活はないし、友達と出掛けようにも、冬真の知り合いで現在暇してると思われる男友達は、一癖二癖あるような奴ばかりなので、多分疲れるだけで終わってしまう。

ちなみに、まともな奴らは部活とかで忙しいし、仲がいい人も少ない。

簡単にいうと、冬真の男友達は変人ばかりなのだ。

今日はそんな野郎と絡む気分ではないので、とりあえず男は却下。

次に、女の友達なのだが……。

多分、誘っても乗ってくれない。

女子ともそれなりに仲がいいのだが、休日に遊ぶほどではない。

それに、普通に恥ずかしいというか……、変な噂をたてられたくないので却下。

後は……いるにはいるが、どれも変人なので却下。

そこまで考えて、冬真はふとあることに気付いた。

「ああ……俺、友に恵まれてないな」

軽く自嘲気味になりながらも、頭を振ってなんとか堪えた。

「駄目だ……。他の事を考えよう」

これ以上、自分の友人関係について考えていたら本気で鬱になりそうだったので、気分を変えるためグルリと部屋を見渡す。

すると、冬真の視界に壁にかけられた時計が入ってきた。

時計の中で回る二本の針は、両方共上、12時を指し示している。

そういえば。

と、冬真は自分が軽い空腹感に襲われていることに気付いた。

暇過ぎて、そんな事にも気付かなかったらしい。

食事を取れば少しは時間を削れる。

暇な土曜日が終わりに近づくのだ。

となれば、行動あるのみだ。

遊んでいた足に力を入れて、ソファーから腰を浮かして立ち上がり、一度伸びをするとキッチンに向かった。

男の一人暮らしだが、料理に使う道具は一式揃えてあるし、冬真も上手いとはいえないが簡単な料理位は作れる。

冬真は野菜炒めでも作るかと考えつつ、冷蔵庫を開けて中身を確認する。

その直後、冬真の顔色が変わる。

「しまった……。買い物にいくの忘れてた」

なんとベタな展開だろうか？

まるで買ったばかりの時と同じように、すっからかな冷蔵庫。

食材どころか調味料すら入ってない。

……なんか泣けてくる。

「はぁ……もういい。飯抜きでいいよ……」

眩いた直後、冬真の腹がグーとなった。

半分鬱に入り、深く溜息をついて、諦めて冷蔵庫閉めたその時だった。

ピンポーン

部屋にインターフォンが押された時のあの音が鳴り響いたのだ。

「やあ、冬真君こんにちわ」

冬真がドアを開けると、そこには腰まで伸ばし、後ろで結えてある金髪と、糸目の顔に浮かべたニコニコとした温厚そうな微笑みが特徴的な青年の男が立っていた。

「あ、泉さん。こんにちは」

ドアノブを握ったまま挨拶を返して軽く頭を下げる。

この人物の名前は泉 イズミ 秋人 アキヒト。

冬真の父親の友人で、アパートを貸してくれた張本人。

見た目通り、典型的なお人よしで、何時もニコニコと朗らかな微笑みを浮かべている。

余談だが、冬真はそれ以外の表情を見た事がない。

実家が、元華族で父親が会社の社長という大金持ちの息子なのだが、訳あって家を離れているらしい。

新しく建てたアパートを貸してくれているのだが、他に住むところがないので、此処の三階に住んでいる。

以前冬真が、何故自分が大家をやらないのかと尋ねたところ、『いやあ、ぼく大家とかやったことないから緊張しちゃうしね。大丈夫、冬真君ならできるよ』と、責任も根拠もない笑顔の返答をしてくれた。

『ならアパート建てるなよ』と思った冬真だが、実際自分が助かっているで口をつむんでおいた。

まあ多少変わっているが、いろいろ世話をしてくれる『いい人』だ。

「えーっと、何か御用ですか？」

冬真がそう尋ねると、泉さんは手に持っていたタッパーを差し出し、

「これ、昼に肉じゃが作ったんだけど少し作り過ぎちゃってね。良かったら冬真君にどうかなあと思って」

「え、肉じゃがっ！」

肉じゃがが……というか、食べ物単語の単語を聞いただけで冬真の顔色が変わった。

もちろん、さっきとは違い、いい意味でだ。

『なんてタイミングがいいんだ泉さん！』と、内心で歓喜する。

「もしかして迷惑だったかな？」

「いえっ、全く！マジ有り難いです！」

顔は微笑んだまま、困ったように首を傾げた泉さんの言葉に、慌てて訂正を入れていそいそとタッパーを受け取る。

「あっ、あがっていきます？お茶くらいは出しますよ」

何か御礼した方がいいと思い、入りやすいように少しドアを広げる。しかし泉さんは首を横に振った後、どこか嬉しそうな表情で喋り出す。

「せっかくだけど遠慮しとくよ。実はこの後、秋菜と買い物に行く予定なんだよね。ふふっ」

「妹さん？それは良かったですね」

秋菜というのは、泉さんの妹で、歳は冬真と同じだ。

泉さんとは違い、実家に住んでいるので冬真とは面識がないが、泉さんの兄妹なので優しそうなイメージが持てる。

言動からわかるように、泉さんは妹の秋菜をかなり可愛がってる。ちよつと度が過ぎるくらいに。

「秋菜がね、ぼくに買って欲しいものがあるんだって！やっぱり頼られてるのかな？頼られてるんだよね！秋菜のためなら家でも土地

でも車でも買ってあげちゃうんだけどね。買うといえなさ、秋菜が三歳の時に近くのパートで迷子になーいー」

「い、泉さん！時間大丈夫ですか？」

「……え？あ、そうだった。じゃあぼく行くね。また明日」

悪いとは思いつつ、途中で話を遮らせて貰った。

さすがに、会ったことのない妹さんの話を長々と聞かされては堪ったもんじゃない。

冬真の思惑通り、泉さんは腕時計を見て微笑んだまま、ハッしたような顔になり、片手を軽く振ると去っていった。

冬真はそれを見送ると、ホクホクと温かさが伝わる肉じゃがを片手に、部屋に戻って行った。

冬真は、泉さんに心から感謝しながらリビングに戻ってきた。

肉じゃが……少しベタな気がするが、空腹の冬真にとっては、有り難い物以外、何物でもない。

大して珍しくもない肉じゃがが、今の冬真には煌めいて見える。

あの、ホクホクと柔らかいジャガ芋が酷く恋しい。

テーブルにタッパーを置くと、キッチンに赴き箸を取ってきた。

皿も用意した。

腹もいい感じに空いている。

箸だってちゃんと洗ってある。

タッパーから感じられる熱も調度いい。

全ての準備は調った。抜かりはない。

肉じゃがへの期待を膨らませ、今、冬真はタッパーのフタに手を伸ばす。

プルルルル プルルルル

携帯の着信音が鳴った。

冬真の舌打ちも聞こえた。

「チツ……誰だよ」

顔をしかめながら、携帯電話をとってディスプレイに映る、相手の名前を見つめる。

「ミトコン」

ピッ

躊躇すること無く電源ボタンを押した。

「さて、肉じゃが肉じゃが」と

プルルルル プルルルル

また、携帯が鳴り始める。

先程以上に顔をしかめながら、携帯のディスプレイを確認する。

「ミトコン」

ピッ

人が肉じゃがを食べようというのに空気が読めない奴もいたものだ。
念のため電源を切っておく。

これで完璧。拔かりだってないはず。

気を取り直して、再びタッパのフタに手を伸ばした。……が。

ピンポーン

インターフォンの音が聞こえた。

ピクツと、冬真のコメカミに青筋が浮かぶ。

心なしか、箸を握る手がプルプルと震えているようにも見える。

ピンポーン　ピンポーン

なんだろうか？冬真の背後にどす黒いオーラが見える。

まるで、地獄の底に凄む鬼達のそれにも匹敵しそうな程黒い。

ただただ、黒い。

握っていた箸を置き、闇を担いだまま、彼はゆらりと立ち上がる。

背後に凄むそれも、同じようにゆらりと揺れた。

今の冬真なら、犯罪とか気にせず人を殺せるだろう。

一事のいざこざが原因でカツとなり、人を危めてしまった人の気持ち
ちが分かってきてしまっていた。

たかが肉じゃがで。

ピンポンピンポン

「冬真あゝ！冬真委員ちよおゝ！いるんだろゝ？」

ドンドンと叩かれるドアの向こうから、憎き宿敵の声が聞こえてきた。

冬真は玄関までくると一度立ち止まり、大きく深呼吸。

そして、ドアノブに手をかけると一気に開け放つ。

「よっ！とうー」

「臆物ぶちまけろっ！！」

『人は過ちの上で

成長する動物である』

一一一一とある偉人の言葉より

「土は美味いか？微生物」

現在冬真は、眼下に寝そべるアパートに訪ねて来た客人の後頭部を片足で踏み付け、じわっと苦い土の味を噛み締めさせている。

俯せに倒れる客人の頭辺りを中心に、朱い水溜まりが出来ちゃっているが、かなり気が立ってる冬真は無慈悲にもそれを無視していた。

「……………あの、冬真委員長。足を退かして貰えると嬉しいです……」

「……………で、用件は？」

聞こえた声が僅かに震えていたので、少し不憫に思い足を退かす。

それでも暫く動かなかった客人だが、やがて血で顔を真っ赤にしながら起き上がってきた。

その間冬真は律儀にも腕組みしながら待っていたのだが、早く昼食にありつきたい為か終始そわそわしていた。

起き上がった客人の顔は、冬真のよく知る人物であった。

客人の名前は水戸和也^{ミトカズヤ}

通称ミトコンドリア（略してミトコン）

短めの黒髪と、日本中の男の顔を足して割ったような顔が特徴……
いや、本当に特徴のない顔をしているのだ。

初対面の人でも、何処かで会ったことがある気がする
と錯覚させる程有り触れている顔。

それがかえって特徴的なものになっている。

冬真とは幼稚園からの12年の付き合いで、その間ずっと同じクラス。
所謂腐れ奴だ。

冬真は何故来たのか理由を尋ねたが、実は大体予想がついていたり
する。

別に幼なじみだからではない。

和也が休日にも、しかもこの時間帯に訪ねてくる理由など一つしかないのだ。

「分かってるだろうけど……まあ、いつものあれだよ」

「やっぱりか……」

和也は、顔の血を腕で拭い取りながら答えるとポケットから桜色に光る液体が入った小甕を取り出す。

それを見た冬真は、口にはださないが『またか……』という心情が伝わってきそうな顔になり、疲れたように肩を落とした。

プロローグ（後書き）

魔法出てこない……

まだまだ本編には程遠いです（；|；）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9493f/>

責務に勤しめ委員長！

2011年1月20日14時50分発行